

# ココロにサプリ

広報メディア研究所代表 上野 弘子

第116回

しのびよる貧困



南の海やジャングルが好きなので、時々アジアのリゾートに出かける。この夏は、語学研修中の息子の顔を見てからフィリピンのセブ島に行ってきた。海辺に建つ巨大なホテルの敷地内には、

手入れされた庭園とプール、さまざまな味が楽しめるいくつかものレストラン、ブティックやエステティックサロン、スポーツジムまである。客室は広くて清潔感にあふれ、窓の外にはエメラルドに輝くプライベートビーチが広がる。シヌノーケリングで海中をのぞくと色鮮やかな熱帯魚が泳ぎまわり、まるで水族館の水槽の中にいるみたいだ。白い砂浜にはパラソルが並び、長期滞在者らしき人々がデッキチェアに寝そべっている。朝食のbuffetには、豊富なメニューが並び、ついつい食べ過ぎてしまう。贅沢かな、と思っても費用は国内旅行よりも安い。

しかし、極楽のようなホテルを一步でると、そこは別世界だ。

埃だらけのデコボコ道を古い年式の車が走り、道端には粗末な家屋が並び、土埃の中を、汚れたTシャツを着た人々が歩いている。セブ島はフィピンの中では豊かで、治安も良い方だと聞かすが、日



Sebu Sep.5.2015

本では想像できないほど貧しい。観光で経済は潤っているはずなのに、地元の人々には還元されていないようだ。以前に訪れたカンボジアでも、アンコールワット見学の見学客から多額の外貨が流入しているのに、人々は驚くほど貧しかった。

カンボジア人のガイドは「一部の政治家が格差社会を生んでいる。政策を変えな



書店にもわが国の貧困を取り上げた書籍が多く並ぶようになった

ければ自分たちの国に未来はない」と話していた。フィピンも同様なのだろう。

4日間のセブ島旅行から帰国した翌日「下流老人」という言葉を初めて耳にし、暗い気持ちになった。人を見下した響きで、なんて嫌な表現なのだろうと思った。しかし、この言葉、瞬<sup>またた</sup>く間に世間に普及してきた。

「下流老人」とは、生活に困窮し、生活保護を受給する、もしくはその恐れがある状態のお年寄りをさす。ここ数年「子ども貧困」が問題視されてきたが、今度はお年寄りの貧困がクローズアップされ始めた。

厚生労働省の発表によると、今年7月に生活保護を受給した世帯は前月比で2964世帯も増加し、162万8905世帯に。3カ月連続で過去最多を更新している。その理由は、景気回復に伴い失業者が減る一方、ひとり暮らしのお年寄りを受給する人が急増しているからだ。

高齢社会が進むのに伴い、お年寄りの

貧困はさらに増えるという予測もある。経済格差が広がり、年金や医療費、介護、物価、核家族の問題などが、急速に家計を圧迫し、普通の生活を送っていた人の中にも、老後を迎える頃に生活に困窮する人が出てくる可能性が十分に考えられるからだ。

OECD(経済協力開発機構)は2012年に、わが国は全世帯の16.1%(6人に1人)が相対的貧困だと発表した。先進国30カ国の中で日本は4番目に貧困率が高いというデータもある。一億総中流と豪語していた時代は、もはや幻なのか。

ほんの少し前まで、一生懸命働けば、老後は悠々自適の生活が送れるものだと思っていた。長い老後を不自由なく生きるためには、どれだけの準備をすれば良いのだろうか。

いや、問題は多くの子どもやお年寄りが貧困に苦しむ国をどう立て直せば良いのか、だ。政策を変えなければ…カンボジア人ガイドの言葉が胸にしみる。

